

●サウンド分析

この曲のここがミソ!

ロンとハービーの美意識に学ぶものは…?

◆はじめに

「月刊スタンダード」で取り上げる曲は、たくさんのミュージシャンによって演奏され、数々のアルバムに収録されている場合があります。その中から、演奏中の各楽器奏者のバランスがよく、かつ全体的に優れた演奏を選び、その各楽器パートをスコアで採譜・解説するというのが、本コーナーです。つまり、その月の課題曲における“エッセンス”が詰まっていると思われる演奏を、各楽器を相互に関連付けてわかりやすく解説しようという趣旨です。

（編集部）

みなさん、初めまして。ピアニストの田中裕士です。今月号から、この“サウンド分析”コーナーの執筆をすることになりました。ここでは、楽器演奏者は勿論のこと、リスナーの方々にも“サウンド・マジック”とも言うべきジャズ・ミュージックのサウンドの仕組みや謎解きを、理論的な話も交えながらお話しし、皆さんにその音楽的魅力を少しでも垣間見ていただければと思ってます。末永くお付き合いください。よろしく！

さて初回はジョニー・キャリンによるマイナー・ブルースの「イスラエル」がテーマ。使用アルバムは『イスラエル/K & J.J.』で、2人目のソリスト、カイ・ワインディング(tb)のソロ部分を取り上げています。

す。まず皆さんにこの演奏を聴いていただきて、次のような点に注目してみて下さい。

①トロンボーンはコードの推移に素直に身を委ねた、歌心溢れるスケッチをしている。

②ロンのベース・ラインのスケッチが、実にセンスが良い。トラッドなブルース・コードの範囲の中で、見事に美しいラインを創っているので、ベーシストの皆さんには特に注目してほしい。勿論ビートもボトムがあって、強力にスwingするストロング・スタイルで、実にナイス・フィーリング。

③ハービーのバックングのセンスの良さにも注目してほしい。1968年当時には、ヒップなアイディアでサポートしている。そのカラーが反映して、全体のサウンドが斬新に聴こえる。正にハービーの美意識の高さを垣間見ることができる。

それでは実際の演奏の中で、色々な箇所にスポットを当ててチェックしてみましょう。

まず1コーラス目。トロンボーンはマイナー・ブルース・コードの推移通りのメロディ（アドリブ）をスケッチしていくとしますが、ロンはコードの推移に伴うベース・ラインをスケッチせずに、Dmキーの曲であることを強調するかの如く、D音でペダル・ポイントを奏でます。

さて、ドラマーはグラディ・ティトですが、ステディにスwingする素晴らしいドラミングです。しか

◆解説・採譜=田中裕士
◆『イスラエル/K & J.J.』（ボリドール
CD:POCM-5023）
◆採譜パート=カイ・
ワインディング(tb)、
ハービー・ハンコック
(p)、ロン・カーター(b)



立体的にしたかったのでしょう。ハービーはすかさずそのロンの意図を読み取り、完全4度音程を含むオープンな響きの和音(4th Interval Build)を1.5拍という奇数のタイミングで提示し、4拍子に対してコントラストをつけます。この2人のセンスによって、一種独特なカラーが出来上がっています（譜面B1、P1）。

2コーラス目の冒頭より、やっとロンは歩き(Walk)始め（譜面B2）、通常のマイナー・ブルース・フィーリングに突入していきますが、1コーラス目のロンのペダル・ポイントが効果となって、2コーラス目の冒頭からパッとカラーが変わりとても美しく、思わず「Yeah！」と声が出てしまします。いかにベーシストのアイディアによって全体のカラーが変わられるかを示すいい例です。

それではまた、来月！

■

たなか・ひろし(p)●1960年生まれ、京都市出身。

19歳で「ロ・デビュー」以来、エリック・

ゲイル(g)G、東原力哉(ds)G、古谷充(as)4で

活動した。現在は首都圏を中心に、中本マリ

(vo)G、井上淑彦(sax)

4、金沢英明(b)3、向

井滋賀(tb)セッション、

等で活動している。な

お、ライヴ・スケ

ジュールは、本誌“コ

ンサート・ガイド”

ページを参照。

1

Tb. Dm7 P. B1

3

Gm7 Dm7

B7 Em7(b5) A7Alt. Dm7

Em7(b5) A7Alt.

Dm7

B2

P2

B2

Gm7 C7Alt. FM7 Dm7

"Israel"

B^b7 A⁷^{Alt.} Dm7 E^{m7(b5)} A⁷^{Alt.}

Dm7

G^{m7} C⁷^{Alt.} F^{m7}

B^b7 E^b7 Dm7 E^{m7(b5)} A⁷^{Alt.}

田中裕士 ● 先日仕事でニューヨークへ行った時、クラブである便人なトラマーが僕に「日本から来るピアニストは、皆同じくハーピーの様に演奏したがるの? 不思議『思つ』と言いました。さて、僕はどう答えたでしょうか?

STANDARD

"Israel"

●名演探譜／ピアノ＝ビル・エヴァンス
Bill Evans (p)
音の切り方への気配りに注目

◆解説・採譜=港 大尋
◆『エクスプロレッシュンズ／ビル・エヴァンス』(ピクターエンタテインメント CD : VICJ-23518)



今日は『エクスプロレーションズ』のビル・エヴァンスのアドリブ5コーラスを採譜してみた。全部で10コーラスのアドリブだが、誌面の都合もあって、前半の、ドラムがブランシを使ってるところまでのものである。そのせいか、音数は幾分控え目で、左手のコンピングも音量は抑え目だ。各コーラス一段目のクリシェ・ライン“A (B) - B^b-B-C”を強調する以外、左手は目立たない。ただ、3段目の1小節目のE^{m7(b5)}での代理和音B^b[△]^{#5}のコードは、控え目とはいって、非常に美しい。

注意深く聴くと、音の切り方に随分気を使っていることが分かる。メロディの中ではスタッカート、スラーを交互に聞き分けたり、白玉を

適度な位置で切ったり。いちいちスラーは書かなかったが、どこでプレスをとっているか見てみよう。

1コーラス目：4、8、12小節
2コーラス目：5、8、10、12小節

3コーラス目：4、8 (9) 小節
4コーラス目：1、7、12小節
5コーラス目：1、8、11小節
という具合だろうか。ダブってしまうところもあるが、大体4小節毎にモーツアルトにもあるし、チャーリー・パークーにも出てくるやり方だ。加えて、オスピナーで拍をずらす3コーラス目の10~12小節目なども効果的。セロニアス・モンクなどが得意としていたものもある。何と言っても、5コーラス目の2拍3連のフレイズがいい。途中からモタさせて、また元に戻った時の気持ち良さは、言い尽くせない味がある。これを弾くとなったらか

用している……などはすぐ分かるが、その辺のスケール理論的なものは省略して、メロディとリズムとの絡みを見ていこう。

まずは、アクセントとドミナント・モーションの関係をうまく利用して、拍節をずらすようなメロディが面白い、2コーラス目の2~4小節目。モーツアルトにもあるし、チャーリー・パークーにも出てくるやり方だ。加えて、オスピナーで拍をずらす3コーラス目の10~12小節目なども効果的。セロニアス・モンクは、ほとんどエヴァンスで完成されてしまったようだ。以降のピアニストに与えた影響は計り知れない。

6コーラス目以降、左手のコンピングを盛り上げて、より華やかな空間が出来上がる。そちらの分析もしたかったけれど、あとは皆さんにお任せします。

① Dm D^{maug} D^{m6} D⁷

G^m C⁷ F B^bM⁷

E^{m7(b5)} A⁷ Dm A⁷

STANDARD